

クラウド活用で学びを次へつなく 塩尻市の挑戦

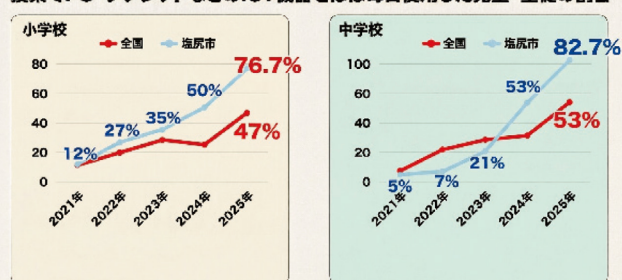
～「Catch & Next」で描く、子どもが主役のワクワク授業～

1 はじめに

長野県のほぼ中央、松本盆地の南端に位置する塩尻市は、人口約6万5千人の都市です。本市では「一人ひとりの育ちにていねいに向き合う教育」を基本理念に掲げ、教育活動を推進しています。

近年のGIGAスクール構想の進展に対し、本市のICT活用は当初、決して順調な滑り出しではありませんでした。令和4年度の調査において、児童生徒による端末の活用頻度は全国平均を下回る状況にありました。しかし、そこからわずか3年で教育現場の風景は一変しました。現場の教員の熱い思いを原動力に、ICTを「毎日の文房具」へと転換する取組を徹底した結果、令和7年度には、小学校で76.7%、中学校で82.7%の活用率に達し、国内トップレベルの状況となっています。同年度にはリーディングDXスクール事業の4校を中心に授業改善に挑戦するとともに、生成AIの利活用にも着手しました。

授業でPC・タブレットなどのICT機器をほぼ毎日使用した児童・生徒の割合



出典：文部科学省「全国学力・学習状況調査 児童・生徒質問紙調査結果（2021年～2025年）」 ©塩尻市教育委員会 学校教育課

さらに、令和8年度には「生成AIパイロット校事業」へ、塩尻西部中学校区の3校で公募申請を行い、この学びを一層推進していく計画です。本稿では、本市の教育改

革の挑戦をご紹介します。

2 逆転の原動力:令和6年度「手挙げ方式」が灯した志の火

活用率が低迷していた状況を打破するため、本市が行ったのは、一律の強制ではなく、変革への意欲を持つ教員の「志」を募ることでした。

(1) 先行実践者によるボトムアップのエネルギー

令和6年度、教員の熱意に応じて「レジェンド」「パイオニア」「サポーター」といった3コースを用意し、立候補形式で先行実践者を公募しました。



① 自発的な「実験場」としての教室

公募に応じた教員は、自らの学級を実験場とし、指導主事と連携しながら「デジタルだからこそできる学び」の実践に向け試行錯誤を重ねました。この自発的な熱意が、市全体の空気を変える原動力となりました。

②指導主事による伴走支援

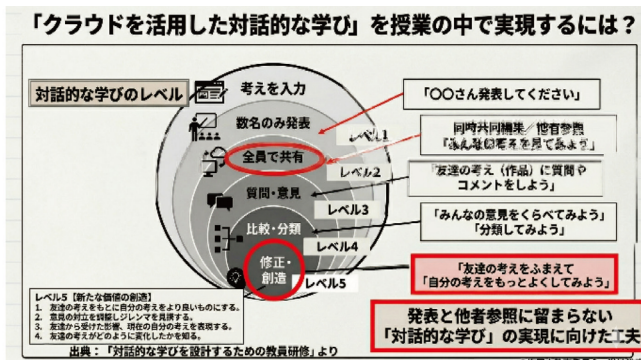
教育委員会は、共に授業案を練り、共に教室で悩む「伴走者」として機能しました。この密な信頼関係が、現場の挑戦を確かな形へと導きました。

(2) 塩尻発の独自メソッド 「Catch & Next」の誕生

塩尻市立塩尻西部中学校において、授業改善の核となる「Catch & Next」が考案されました。

①対話を通じて「知」を更新する仕組み

「Catch & Next」は、Google スプレッドシートを活用し、授業の振り返り（Catch）と次の問い（Next）をクラウド上で言語化して学びを連続させる塩尻市独自の学習サイクルです。最大の特徴は、クラス全員の記述を「じっくり見る時間」を設け、「最初の考え」と他者を参照して「改善した考え」を比較入力して思考の変容を可視化する点です。これにより、意見の「共有」にとどまらず、自らの考えをアップデートする「修正・創造」の深い学びを実現し自律的な学習者を育成する画期的な手法となりました。



②児童生徒のメタ認知能力の向上

生徒の声には、「友達考えを Catch することで、自分の間違いに気づけただけでなく、もっと良い方法が見つかった」といった、成長する姿が現れています。

3 面的拡大への転換:令和7年度 リーディングDXスクール事業

令和7年度、文部科学省の「リーディングDXスクール事業」に採択されました。指定校3校（塩尻市立塩尻西部中学校、宗賀小学校、洗馬小学校）と協力校1校（榎川小中学校）の計4校を中心に、「GIGA ×深い学び 子どもが主役のワクワク授業」をテーマに掲げ、実践のモデル化と普及に取り組んでいます。一部の先駆者が灯した火を市全体へ広げるため、主に以下の5つの取組を推進しました。

(1) 「数秒で真似できる」原本の共有 (校務の効率化)

先行実践者が磨き上げたワークシート等を「原本」として共有ドライブに蓄積しました。「コピーして作成」すればすぐに自校の授業用にカスタマイズできる仕組みを整え、ICTに苦手意識を持つ教員も円滑に実践を開始できるようにしました。

(2) 4校合同DX会による知見の循環 (質の平準化)

4校をオンラインで繋ぐ「合同DX会」を月1回開催し、成功事例だけでなく、失敗から学んだ「落とし穴」も率直に共有し、教育の質を均一かつ高速に引き上げています。

(3) 学校の壁を越える「オンライン職員室」 (意欲の醸成)

目的別 Google チャットを活用し、4校の教員が一つのチームとして機能する「オンライン職員室」を構築しました。指導主事も各校の通常授業風景を写真やコメントで「ライブ中継」し、教員の挑戦心を刺激しています。

(4) 全校展開するタイピングコンテスト (基盤スキルの育成)

持ち帰り端末の「文房具化」を支える基盤として、「し

おじり☆タイピングコンテスト」を企画しました。指定校での先行実施から市内全14校へと対象を拡大し、楽しみながら基礎スキルを底上げするとともに、家庭学習の充実を図っています。

(5) 「Catch & Next」の面的展開 (深い学びの実現)

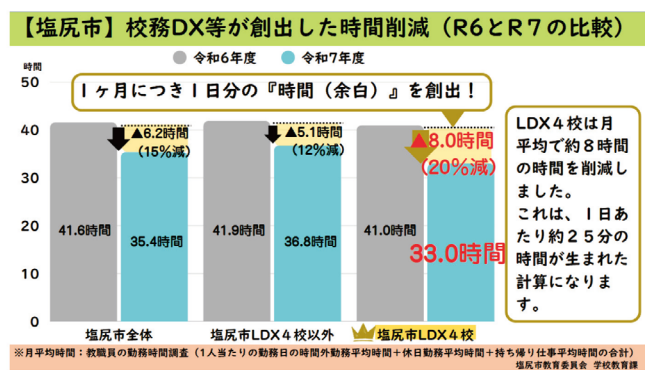
令和6年度に誕生した「Catch & Next」を本事業の柱に位置づけました。振り返りと次への問いをクラウド上で連続させるこの仕組みを4校全体で推進した結果、子どもたちが自ら学びの舵を取る「深い学び」が各校で確実に広がっています。

4 校務DXが創り出した 「20%の余白」という最大の成果

本市の取組において最も特筆すべきは、研究指定校としての追加業務を背負いながら、教職員の勤務時間を劇的に削減した点にあります。

(1) 「攻め」のDXによる持続可能な体制

校務のクラウド化等を推進した結果、リーディングDXスクール事業の4校において、時間外勤務等を20%削減するという成果を達成しました。



①「1日分の余白」がもたらす変化

月平均で約8時間の余白を創出。この時間は、子どもと向き合う時間や、より質の高い教材研究の時間へと再

投資されました。

(2) 具体的かつ実効性のある校務効率化

①年間行事予定表のハブ化

予定表をスプレッドシート化し、各行事の計画・反省データへ直接アクセスできる「ハブ」を構築しました。資料を「探す」手間をゼロにし、次年度へ円滑に知恵を繋いでいます。

②保護者コミュニケーションのデジタル化

Google フォーム等を活用し、保護者懇談会の希望調査等の事務コストを削減。対面での面談そのものの質を高めることに成功しました。

5 自律的な学習者を育てる 「塩尻流・学びのデザイン」

校務DX等によって創出された「余白」は、本市が優先課題と掲げる「子どもが主役の授業」の深化へと注がれました。

(1) 「3つの視点」と「8つのチェックリスト」による授業改善

授業の質を客観的に見直す指標として、「主体的な活動量」や「教師の見取り」などから成る「8つのチェックリスト」を策定しました。これに「自己調整学習」を柱とした「3つの視点」を加え、授業改善の解像度を高めています。

①「ティーチング」から「コーチング」へ（役割の転換）

教員は「正解を教える人」から、子どもの学びを支え、共に問いを深める「伴走者（コーチ）」へと役割をシフトしました。教員が話す時間を削り、子どもの思考と活動の時間を最大化するデザインが、定着しつつあります。

②個別最適な学びと協働的な学びの一体化（ワクワク授業）

一人ひとりが自分の課題に合わせて学ぶ時間と、クラ

ウド上で他者の考えを参照し対話で深める時間をシームレスに繋いでいます。デジタルを文房具として使いこなしながら、子どもたちが目を輝かせて学ぶ「ワクワク授業」の光景が、日常の姿となりました。

6 次なる挑戦:生成AIが拓く未知の教育可能性

ICTが基盤となった今、本市は次なるフロンティアとして「生成AI」の戦略的活用に着手しています。

(1) 生成AI:3段階の導入ロードマップ

①【Step1】教員の校務活用(働き方改革の加速)

まずは教員自身が、AIを「有能な副担任」として事務作業や資料作成の壁打ち相手に活用し、その利便性と限界を肌で実感するところから始めています。

②【Step2】教員の授業活用(授業デザインの進化)

次に、AIを教材研究のパートナーとして活用し、子どもの興味・関心を揺さぶる授業デザインの実践へと移行します。教員の専門性とAIの機動力を掛け合わせ、より質の高い「ワクワク授業」の構築を目指します。

③【Step3】児童生徒による主体的な活用(学びの深化)

最終段階として、ハルシネーション(もっともらしい嘘)等の特性を正しく理解した上で、子どもたちが自らの学びを加速させるツールとして使いこなす力を育てます。

(2) 未来を拓く「伴走型」生成AI先行実践

令和8年度「生成AIパイロット校事業」への申請(塩尻西部中、宗賀小、洗馬小の3校連携)を見据え、今年度は「生成AI先行実践者」を公募しました。

①指導主事によるリテラシー指導の徹底

先行実践学級には指導主事が直接入り、安全運用の徹底に加え、自らの思考を磨く「問い直す力」を直接

指導しています。

②「ワクワク」を学びのエンジンに変える共創

AIとの対話で思考が広がる驚きを、子どもと教員が共に体験しています。この「共に未知に挑む姿勢」こそが、本市が目指す次世代型教育の象徴です。

7 おわりに

本市のICT活用は、当初の低迷期を経て、現場の教員の熱意と教育委員会の「伴走型支援」が両輪となり、全国トップレベルの活用へと劇的な変化を遂げました。その過程で得た最大の財産は、特定の誰かだけが頑張るのではなく、学校の壁を超えて市内の教職員が一つのチームとして教育DXを推進する「文化」が根付いたことです。

「Catch & Next」に代表される対話的な学びの深化や、校務DXがもたらした「時間の余白」は、すべて本市の基本理念である「一人ひとりの育ちにていねいに向き合う教育」と、「子どもが主役のワクワク授業」を実現するための確かな基盤となっています。

今後は、生成AIの戦略的活用をはじめとする新たな挑戦を通じてこの基盤をさらに強固なものとし、次世代を担う自律的な学習者の育成を加速させていきます。これからも塩尻市教育委員会は、現場の教員の「やってみよう」という挑戦心を全力で支え、子どもたちが目を輝かせて学ぶ教育の創造に向けて、歩みを止めることなく伴走を続けてまいります。

【Google スプレッドシートの活用】クラウドを活用した対話的な学び

<https://x.gd/3E9XMq>



塩尻市リーディング DX スクール事業 実践報告書資料

<https://x.gd/muXJe>



塩尻市リーディングDXスクール特設サイト

<https://x.gd/cjmHYF>

